

句集 「蜘蛛の糸」

一九九〇年代

一筋の径其処で尽きななかまど

退職間近の頃だったと思う。モチーフとなつたのは、秋、立山の室堂に下る山道で観たなかまどの紅葉である。心理的には、一種の挫折感を抱いての登山であった。

二〇〇一年

樹齡積む花懐に老いの群れ

四月

桜散る水面に優し權の音

四月

静けさや水面も花も行く舟も

四月

願わくは花散るような大往生

四月

ビール飲む口元に散る桜かな

四月

ボート漕ぐ若い二人は咲く桜

四月

水芭蕉木道消えて空となり(尾瀬沼)

夏

行く夏や台風のごと孫来たる

八月

賑やかに墓洗いたり孫曾孫(八柱霊園)

九月

錦秋の終わり待たずに一人旅

十一月

錦秋の極み見たさに足を止め

十一月

木枯らしに抗して酒屋へひた走る

十一月

冬の湖輪廻願望白き群れ(新潟・瓢湖)

二〇〇三年

黙る人聞かぬ人増え原爆忌

八月

闇忘る人に闇濃き原爆忌

八月

街歩き死者の気配あり原爆忌

八月

「八・一五に想う短歌五首」

東方の空赤く焼け疎開地の

夜中に群れて母想う子ら

戦争の放棄誓いし国なれど

命の重みいつしか軽く

人の性業火の地獄知りつつも

また業火呼ぶ平和に飽きて

過ちは繰り返さぬと彫り込みし

碑の文字いまだ鮮やかなるも

血の滲む折り鶴の群れ風雨経て

今は儀式の飾りとなりぬ

二〇〇四年

一筋の道そこで尽きななかまど

その奥に誘う赤のいや増す

九月

二〇〇五年

老いし身に微かに触れる春風の

静かな息吹き青春想う

三月

台風一過頭上に残る朝の月

七月

寒月の死に集い来し知己の前

白鬚一つピクリともせず

(幸田さんの通夜にて)

十二月

二〇〇六年

甲子園汗ほとばしり夏は行く

八月

二〇〇九年

茸狩り幽界の美味鳴りひそめ

九月

行く秋の 奥入瀬に身を染めさせて

うたた寝の 妻に老い見ゆ寝酒酌む

雨の音 徳利置く音寝酒かな

行く秋や 戦後に生きし我もまた

二〇一〇年

悲しみが陽炎いて見ゆ原爆忌

八月

二〇一一年

脱ぎ捨てた浴衣のような古き俺

八月

喜寿過ぎて俺も羽化がしてみたい

八月

二〇一二年

赤ママの日だまりありて「小休止」

十月

凧の口笛走る森に入る

十一月

乱立の党と悼むか除夜の鐘

十二月

子や孫の夢細り行く鐘淋し

十二月

手の甲の皺摘まみ上げ除夜の闇

十二月

二〇一三年

網膜に陰り宿りて初日の出

一月

長男のタイ行き案ずる初日かな

一月

啓蟄や八〇回の夢重ね

二月

春浅し「もう」「まだ」飛び交う立ち話 二月

満を持し咲く八重桜妬みたり

四月

五月来てグランドの声天に抜け

五月

さくらんぼ白磁に踊るAKB

五月

幼子に還りて屈み蜻蛉観る

十月

絵手紙に神護寺の紅葉散りて居り

十月

行く年の笑み懐に除夜の鐘

十二月

八十年重み同じ同ふ除夜の鐘

十二月

二〇一四年

老体に袖子の香沁みて歳送る

一月

餅膨れ春に病む身の初笑い

一月

節分や外に声なく上げる腰

二月

春よ来い名残の雪を鷺掴み

三月

桜の声生死ご自由にと聞こえたり

四月

老いの身の窓開きたり柿若葉

五月

明けの田に白き空低く梅雨に入る

六月

汗に耐え夏に決別秋刀魚焼く

九月

鰯雲一瞬かかと宙に浮く

九月

大銀杏息を凝らして散るを待つ

十月

二〇一五年

笑み解けてゴミ捨て時の隣人愛

九月

二〇一六年暮

目鼻耳歯も失^のうなりて柚子湯かな 二〇一七年賀状

二〇一七年

入れ歯割れお帰りなさい離乳食

三月

白木蓮散り際恐れ清く座す

三月

お花見と孫が励みの老^{とし}齡となり

四月

二分咲きが喘いで五分まで駆け上がり 四月

紺青を叩いて寄り添う夫婦鯉 五月

悲喜揺らぎ紫陽花心棲みつきぬ 五月

どっちら取る核ミサイルか四季の花 六月

どっら取る核ミサイルか孫の笑顔かお 六月

憧れと願い溢れて天の川 七月

朝顔の萎れし上に明日の花 七月

手折らんとして月に詫び夜の芒道 八月

山の秋湖面にも映え万華鏡 九月

目眩めく遊覧船に秋溢れ 九月

金の穂に掃き清められ夜の月 十月

耳病みて一層沁みる除夜の鐘 十一月

立ち昇れ去年こぞの暗雲断ら切りて 十二月

二〇一八年

豆撒かれ北恵方巻ミサイル発射せり 一月

女雛笑み「史」と「志」の重み零れ居り 二月

散る桜掌に受け胸に綴ず 四月

友先に逝きて寂しき花見かな 四月

風に舞う花びらに孫の笑い初め

四月

透明なせせらぎを切り鯉の群れ

五月

被災地の水嵩減らず飯を啣む

十月

へりの綱蜘蛛の糸なるわが命

十月

血圧の変動アジサイの色に媚び

十月

東西の文化担いて菊薫る

十一月

また一つ鐘の音零れ 星揺らぐ

十二月

目耳鼻歯も取り戻し除夜の鐘

十二月

蕎麦待ちて遠く鐘の音数え居り

十二月

袖子の香に肌包まれて立つ観音 十二月

二〇一九年

正月の日本歯み締め香るもの 一月

焼く人の心が映る餅の味 一月

春近し苗の空に足伸ばし 一月

春近し苗空見ゆ脚に羽根 一月

我負けじ男勝りの雛も居て 三月

第九ソ口寝ぼけ桜の目を覚まし

三月

春の土七草育て香りたる(母の日になんで)

五月

紫陽花を梅雨虹色に飾り立て(雨滴が花ビラに映えて) 五月

風に揺れ七色の水玉抱く梅雨の花 五月

赤々と散り行く紅葉君連れて(今はこき瀬戸さんへ) 十一月

春雷やハチ公前で初デート(和子との思い出) 十一月

廻り来る子年最期に日は沈む 十二月

振袖に羽根高く打つ白き腕 十二月

二〇二〇年

袖揺れて白き腕伸び羽根の舞う

一月

軒先に五輪が走り子年来る

一月

今年だけネズミ可愛や「子」の生まれ(子年にらなんで)

子ネズミを見て直ぐ逃げる「寅」女(子年を迎えて)

振袖の白き腕伸び羽根の舞う

一月

振袖に羽根の音愉し白き腕

一月

黄金色艶に厚みあり冬の花

一月

断捨離に決断鈍く本の山

一月

声照れて豆撒かれても鬼気去らず

二月（節分に）

内裏様段駆け下りて歌いた気（桃の節句に因んで）

リハビりに寒風吹き付け耐えがたく

「ハヶ岳^ヤ」の縦走心に浮かぶ 二月

ニユーコロナ弱き羊を蹴散らかし 三月

老いの身にとどめを打つやニユーコロナ 三月

美しき涙零せず別れけり 三月

ニユーコロナ涙惜別棚に上げ

（以上四句 ニユーコロナと聞いながら）

白木蓮正座崩して散り始め

(表通りのハクモクレンももう終わりか 三月十五日)

ヒヤシンス紫紺の夢の芽吹きかな

(多彩な花に敬意を表す。ポピー招待状に)

音立てる菖蒲の肌の励ましよ

(菖蒲湯で、老いた肌見つめつつ。ポピー招待状に)

短冊のペン先揺れて文字乱る

脳梗塞の後遺症残る

音かすれ意味逃亡の我が耳も

まだ生きん事望んでおるや

リハビリの歩む彼方に雲ありて

疑心暗鬼の一步踏み出す

(以上、七夕のぼやき 短歌3首。七月七日)

もし我が九州に住む身にあらば

我が家恋しく共に崩れん

(九州の水害と悲惨な思いで、見ている。七月七日)